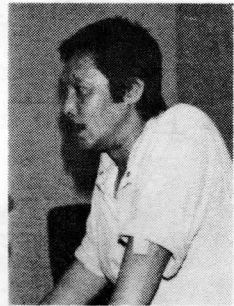


寄せ場とは何か



山岡 強 一

講演といわれても、講演みたいに立派にならないというか、僕はふだんから寄せ場についていろいろ考えているつもりなだけで、実際は、はっきり整理されてないということがあって、できたら、実えながら話すという感じになることしかできないので、ぜひ、そのことを了承してほしい。できたら今、考えることも充分整理されていないのだけど、これを機会に、皆で寄せ場ってなんなのか考えていくみたいにな、ぜひ、してほしい。

日頃そういうことを切実に思うのは、例えば労働運動史なんかみえた時、必ず失業者の問題みたいなのは出るんだけど、その下層労働者の問題として、労働運動の歴史の中に下層労働者の運動が登場するということがほとんどない……。どうしてないのか一般的にそういわれる時は多分、末組織の労働者という形でガサッとくくられて組織しなけりゃならんという形で全部終らされて、あとは工場労働者とか官公労の闘いという形でしか語られていない。だけどそういうことだけ考えても、寄せ場を軸とするもって広範な下層労働者の問題が、真剣に考えられていかなければならない。別の言い方をしたら、労働運動史だけでも労働運動を補っていくものとして、下層労働者の闘いがぜひ、掘りおこされなければならぬんじゃないかな

いかなと考えます。まあ、それは寄せ場で働く労働者の問題としてみると、もうひとつは、寄せ場に住むっていうかな、寄せ場っていう空間みたいなのが存在していて、その寄せ場—地理的な空間みたいなものもつ意味については、なかなか捉え切れてない。それについて僕らがいとも考えることは、寄せ場の近くに必ず、在日朝鮮人の居住区があったり、それから山谷なんか特にそうだけど、被差別部落の中に寄せ場がつくられていったという経緯がある。けれども部落の歴史が語られていく時には、部落史としてしか語られてない。在日朝鮮人が語られる時には、在日朝鮮人の問題としてのみ語られる。それが双方、隣接しながら、広範な空間が作られていったという関わりを明らかにし、そういうことを、一度、しっかり掘りおこしていかなきゃならんと思うのです。特にそれを切実に思うのは、今の時代、例えば労働運動といってもなかなか職場で闘うというのは困難です。生産点で闘っていくのは非常に困難な時代で、地域での闘いというのが非常に重要だとさかんにいわれる。けれども、その地域の抱えるさまざまな歴史性とかそういうものが、特に寄せ場——山谷の場合とか、釜ヶ崎の場合とか、名古屋の笹島の場合にしても、(寿町の場合、若干ニュアンスが違っけど同じような経

緯をはらんでゐるわけで、そういうことが正確に掘りおこされてない。それが日本の社会の中にどんな位置を占めるのか、それが労働なり、地域の住民の抱える問題の中で、どのような位置を占めるのか、みたいなこととして、寄せ場の問題は正確に一度、しっかりと掘りおこされなきゃならんと思う。

つぎに、僕ら、寄せ場みる時、六〇年代から切ってみてゐるんですけど、六〇年代以降、寄せ場の問題で一番大きいのは、六〇年代からだいたい五五年体制といわれる、議会制民主主義と経済侵略が本格化する時代で、その中に市民社会がどんどん成熟していく時代。その下に寄せ場というのが逆に暴動として現われたり、とにかくクローズアップされるわけですね、マスコミでもなんでも。そのことの意味みたいなものがなんなのかということが、ひとつあると思う。市民社会の成熟過程の中に寄せ場っていうものが、そういうふうにせり出てくるということがあると思う。それをもう一度、問い直していく。いま市民社会が成熟してきていて、それなりにある程度ハッピーだと思われてたことがそうでない時代にきていて、そこにはまられた、市民社会自体がはらんでた寄せ場の問題とこのを考えていかならんと、そういう時代じゃないか。それと、日本の労働運動なりを、労働者の中でもう一度とらえていく。そういうトータルなところから考えなおす必要があるんじゃないかな。

で、大ざっぱに寄せ場の歴史の流れを、不十分ですけど話していきたいと思います。その前に、寄せ場についていうと、ひとつの社会的な社会という空間は、階級社会が発生してからいつもあつたんじゃないかなと思う。これは正確にみていく必要があると思うんだけど、そういうものが本格的に今につながり、寄せ場という形

で問題になるのは、資本制が確立してからでないか。単に社会外社会といわれた中世とか近世と違つた形で、市民社会、国家の中に完全に包摂されながら、秩序の弱い環として、寄せ場が常に生みだされてきたというようなところが問題なんじゃないかなという風に思う。だからそういう意味では、寄せ場っていうのは特殊、階級支配一般である中というより、そういう流れの中に産みだされるんだけど、近代になってから資本制との関係で考えていく必要があるんじゃないかなと思います。

で、ここに簡単にレジメ（別掲資料1参照）を作つただけど、資料不十分で……。このところ厚生省に日雇健保の問題でずつと行つて、それからあと日大に行つて、その途中でずつと書いてたもんで、簡単にこんな風になるんじゃないかというところだけ書きました。寄せ場っていう問題と、労働力としての寄せ場を出入りする人たちとを、大雑把に位置づけていくとこんな流れになるのかな、と考えてみた。というのは、どんどん直していつて、正しい歴史として書き直していかないと。僕らの運動つてのは、ひとつつづつまた新しい運動ができるという形であつたら非常にヤバイんで、歴史を総括しないと、運動つてのは蓄積しないんじゃないかなと思つたのです。例えば第三世界なんてのは、必ず、英雄を語りついで、英雄の名前をもつた英雄というのかな、そういう人達の組織をどんどん作つていったわけですよ。そういう生きた歴史みたいなのを、僕ももう一度、しっかりと掘りおこしていく作業が必要だと思つた。

寄せ場の形成については簡単にみて、ひとつには江戸時代、封建制の末期に資本主義経済が発達してきて、その中でさまざまな幕藩体制の矛盾が出る中で、逃散農民などが都市に集中してくる。これ

を一部送り返しはするんだけど、送り返すだけでは間にあわんという中で、囲い込んでいくことで人足寄せ場が形成されていく。石川島とか、関東地域では新田開発とか、そういうのがあると思う。それを、主なものは授産施設というより治安のために、寄せ場がそういう意味では浮浪者をどうするかという対策として、江戸末期はあったんじゃないか。問題は、山谷なんかの場合みると、人足寄せ場の形成とそれから明確に被差別部落の双方が山谷地区にあったということを考えあわせていく必要があるんじゃないかなと思う。で、人足寄せ場と山谷が（車弾左エ門の配下にある山谷とは重なってないわけだけど）そういった形であったということ。

明治維新後になると、資本主義がずっと進められ強行される中で、どうしても賃金労働者を創出しなかりゃならんという中で、当時の明治の資本家ども、政府がやったことは、人足寄せ場に集められた労働力を、囚人労働、あるいは監獄労働の供給源として利用した。これの典型的な例というのは、横須賀の造船所です。前は横浜の刑務所から連れていったのだが、連れていくのが面倒くさいってんで、刑務所自体を横須賀に移しちゃう、という経緯があるらしいんですけど。あと炭鉱もそうだし、北海道の炭鉱、九州の炭鉱なんかも、最初は全部囚人労働を動員する。囚人労働を動員するってのは、江戸末期に形成された、人足を強制労働させた思想をしっかり受けついで、それをテコとして使ったんじゃないか。あと、どんどん資本主義が急速に発展しだすと、囚人労働だけでは間にあわないところから始まるのが、強制労働ができるような形態としての飯場制度とか、納屋制度とか、親方制が導入されるきっかけです。親方の手元にずっと子方として包摂されていて、そこに全部

ぶちこまれていって強制労働させるといいう形が、まず先行的に進むわけですね。それと同時に明治時代の農民はそれほどではないのだけど、例えば秩父困民党の農民たちが、借金に困って娘を売って夜逃げしなかりゃならんという背景の下に蜂起したように、都市へどんどん流れてくるということも、同時に重なるわけですね。それと日本の資本主義というのは、外国——朝鮮とか台湾とかを同時に侵略していくわけで、その人たちが住む所といたら、安い所をさがして住むわけで、それがだいたい寄せ場周辺に住みだす。片方で囚人労働、強制労働みたいなものをテコにして、労働力を動員しながら、もう一方で、日本全体の農村から農民を都市へ流しこんで、それで下谷万年町あたりに雑業賤民といふのかな、さまざまな芸をやる人とか、酌婦とか、いろんな職業の人たちが集まる地域が形成されていく。そこをまたテコにして、飯場への供給源みたいなものを作っていく。そういうものとして寄せ場が本格的に形成されてくるんじゃないか。寄せ場が、ひとつ、都市周辺の労働力を保障していくと同時に、国策産業で強制労働させる、飯場や納屋へ人を狩り集めていく場所として、寄せ場が有効に本格的に形成されだすと。それが日本の資本主義の出发点においてあったんじゃないかと考えます。

ここで僕らが正確に把握できないのは、当時山谷の側の橋場の辺に部落があったわけですが、それがどうなったのかということが正確につかまれている。また例えば山谷周辺に、一九三〇年代に朝鮮人がたくさん渡日してきていて、玉姫から今の千住大橋にわたる、特に千住大橋から三ノ輪の周辺にいっぱい住んでたというのが、記録に残っているわけです。現にそういう生き残りの在日朝鮮人もい

るわけです。そういう闘いがどんな風に重なっていったのか、あるいは重なることを何か疎外してきたのかというようなことを、もう一度整理しなけりゃならないと思います。そういう風にして戦前の資本主義が発達していった、その下での労務供給体制が、飯場制度、納屋制度という形で強制労働のできるような労務体制が出来る。それと同時に、その中継基地、あるいは推積っていうのかな、労働力を推積していく場所、その供給源といった意味での寄せ場みたいなものが、都市のどまん中に形成されていく。これが、山谷、釜ヶ崎というものの近代でのまず出発であると考えます。

これがほぼ戦時体制になると、土方とか日雇層が労務報国会に、そうでない労働者層は産業報国会に組織されていく。労務報国会に組織されていって、そこが全部、窓口になっていくというのが戦時体制だ。その下で強制連行がばんばん行なわれて、寄せ場そのものより、飯場制度をテコにした強制労働の方がより本格化していくという時代が戦時体制じゃないかと考えます。そこで、この辺をもっとしっかりおさえる必要があるなと思っています。このあと、敗戦になると、産業報国会はすぐ解体されるわけですね。戦時中のファシズムの基盤であったものを、戦後全部断つと。民主化にむけて断っていくということで解体させられるんだけど、日雇層の労務報国会だけは、米占領にとって必要な労働力を供給するものとして残さんとまずいという視点から残されて、名前は労務協会と変えらる。これは正確に調べてないんだけど、さっき、三ちゃんと話しながら来たんだけど、センターの所に労務協会みたいなのがあったというのがうろおぼえにある。つまり、職安行政が本格化するのが四七年くらいからかな。それまでは日本の労働行政っていうのは

厚生省がやっていて、労働者ができるのが四七年くらい。で、はじめ警察と厚生省の手から離れて、日本で労働行政っていうのが本格化するんだけど、それまでの間、労務協会みたいな機関が残されていたことだと思う。まあ、職安行政というのは、米軍が持ちこんで本格化するんだけど、この労務協会とのかねあいという、やはり手配師制度というのが温存されるという構造になるわけです。これは山口組なんか、神戸港をどんな風に制圧していったかというのをみていたら面白いことがわかるので、時間があつたらあとで、それも、報告します。

ま、そういった中でとにかく一九四五年から四六年というのは、仕事よこせとか金よこせといった闘争が、非常に活発に闘われた時期であった。山谷の方でも、そういった闘いが少しづつあつたと聞かれています。ただし、四九年から、寄せ場の労働者の闘いがやばくなってくるということじゃないかと……。それはちょうどドッジラインというのですか、あのころで、大合理化が行なわれて、失業問題が一举に出てきます。と同時に国が失対事業を開始する時期なわけで、要するに下層の問題というのが、失業一般の問題——もちろん、失業の問題ってのは大切なんだけど——失業対策一般の中に入っていくってしまふ。それが、その後の全日自労がだんだん細っていく（我々よりはもっともっと力があるわけだけど）、なんかおかしくなっていくきっかけでないかと考えます。で、ここまできて労働運動が停滞するんだけど、もう一度、五〇年から五三年の朝鮮戦争のころで活き活きしたすわけですね。活き活きするのは、日本の労働運動全体が盛り返したのかも知れないけど、下層の闘いをみても、わりと活発な闘いがあつた。特に在日朝鮮人なんか飯

場に『新朝鮮』というような機関紙をもって配っているわけですね。そうして、当時の朝鮮戦争に対する祖国防衛と後方攪乱という観点から、賃金問題なんかでもって労働争議をバンバンやっている時期です。この時期が、ほかの闘いと較べてどうなのかがまだ正確にみえないということがあります、一番面白いのは、下層労働者の闘いが活き活きするのは、だいたい在日朝鮮人が入りこんできてエネルギーが加わった時なわけです。ずっと歴史的にも面白かった時期は、戦後でいうと、この五〇年〜五三年の時期だし、戦前でいうと、二〇年代から三〇年代ちょっとまでの全協・土建部の闘いなんか、ずっと在日朝鮮人を軸にした闘いだったと。これが、ほぼ、闘いとして負けていく中から、寄せ場の問題が社会問題にはなるんだけど、他方で一挙に労働運動の主流からとにかくはずされていく時代が、五五年体制の確立ではないかというふうにもみるわけです。

五五年からの寄せ場の問題ってのは、さっきもいったように、失対問題としてしかみられないという形でもち出されてきます。例えば飯場でどういふふうに動員されているのか、寄せ場の問題と飯場制度なり、そこにともなう強制労働なり、強制搾取なりという問題が出てこなくなるわけです。失策問題一般にしてしまうと、で、そういうものが四五年からあって、一度、ワットと五三年で出るんだけど、ま、五五年体制になったらほとんどそうならなくなる。再び全日自労などの運動の中には集約されていくような状態になってきて、五五年体制の中で疎外されてしまった存在として、寄せ場が独自に形成されていくことです。それと、高度成長長期のとは口に立つので、資本の側がどんどん良質の労働力を吸収しだ

す。職安で求人するよりも、路上の手配師の方がいいも仕事だとか、橋梁の仕事だとか、どんどん持ってくるもんだから、そういう所で寄せ場自体が、別の意味で活性化していくわけです。問題は、その活性化してくる中で、手配師制度をテコにして、飯場なり暴力支配が息づいてくるんだけど、結局、既製の労働運動観というのかな、既製の運動のやり方なり考え方だったら取り組めないまま来て、六〇年代に入っていくことになります。六〇年に入るとこれが加速化されて、寄せ場が本格的に肥大化していく、どんどん大きくなっていく。農村が解体され、エネルギー転換で炭鉱からどんどん労働者が放出される。そういう人たちが、京浜地区だとか、大阪周辺とかに集まって、その人たちを中心に戦後の寄せ場が形成されてきているということがあると思う。で、その人たちが暴動という形で自分を表現してきたというのが、六〇年代以降の問題であつたと思います。

ここで、ひとつ今とこれからの問題として正確に、調査したりして考えていかなければいけないと思つているのは、寄せ場の問題は、さっきもいったように、在日朝鮮人らのエネルギーと出会った時、非常に先鋭的な闘いができた。しかし、朝鮮戦争以降、なかなか出会えない構造ができちゃっている。なんでかっていうのは正確にもう一度、調査する必要があるんじゃないかと思つているわけです。大まかなところでいえることは、六五年の日韓条約で、新植民地主義的侵略が開始され、いわゆる戦後の日韓体制が始まって、南北分断が固定化されていく。そうした時、日本の独占資本は、在日朝鮮人資本の日本独占への吸収をうまくやりとげているのではないか。その下に在日朝鮮人の労働力を包摂して、資本との闘いを組

みづらいような構造を生みだしてしまっている。戦前の三〇年代と
いうのは、朝鮮労総という組織があつて、それを解消して、いきな
り日本人の全協と一緒にたつて日本人の労働者と朝鮮人の労働者が
共同闘争が組めて、資本との闘争がやれたわけです。戦後の五〇年
もまだ、やれたわけです。飯場なんかで賃上げ闘争とか、飯場を
占拠したり団交したりという闘いがやれた。しかし、それができな
くなつていく構造が、今の日韓体制の中にあるんじゃないかと考え
ます。在日朝鮮人が六〇万人といわれていて、実際はもっとふえて
いるという、そういう人たちが、全部、いい暮らしができては
ずがない。ほぼ、僕ら寄せ場の労働者と変らん生活を、いまだにし
ている人が多いはずで、そういう人たちが資本との闘いなりで浮き
出てこない。そういう浮き出てこさせない構造が日韓体制にあるん
じゃないか。だから、五五年体制から日韓六五年の新植民地
侵略というもので、やっぱり、日帝下の下層に生きる人間・労
働者も封じこめられていく。封じこめてしまった日本の社会なり、
日本の労働者の側の問題もあつたんじゃないかということも、もつ
と緻密に考えていかならん課題じゃないかと思ひます。

そして、六〇年代からほぼ七三年のオイルショック以降の生産
調整に至つて、一挙に寄せ場が新たに再編されていくという過程が、
今に続いているというふうにいえるんじゃないかと思ひます。で、
ま、この中で高度成長を続けてきた独占の再編が行革みしたいな形で
ずっと攻撃があるし、今また産業構造の再編があるし、そして八〇
年代の総合安保構想という、軍事だけでなく生活も包みこんだ安
保というような、あらたな動員構想の転換がある……。

これを一挙に僕らの身近な問題としてひきつけてしまつて言つと、

ちょっと短絡のしすぎかなと思ふんだけど、最近八三年に横浜で
少年たちの労働者に対する虐殺攻撃があつて、それから山谷では右
翼皇誠会が攻撃してきて、またこの三月五日に職安のそばでたき火
してた人が、地域の住民から、たき火がうつとおしいという感じで
虐殺されている。そのあとにも地域の人が、ちょうど風の強い日だ
つたんだけど、火の粉がとんでうるさいということでもめて、ちょ
うど我々もかけつけて、これは防衛できたということがありました。
これらの攻撃性の根拠みたいなのはやっぱり、今、山谷の周辺に住
んでいる人々が、弱者に対して出口を求めていかざるを得ない時代
がそうさせているんじゃないかと思うのです。その時、今の支配
者が持っている総合安保構想というのが、ほんとうに成功している
かどうか成功させてしまふのか否かという問題があると思ふんだけ
ども、支配者がそういう政策を出してくる。その背景はたぶん、地
域住民の攻撃のような形で直観的にしか出てないけれど、すでに
始めている。実際、寄せ場の労働者っていうのは、きちつと所得税
を払つたり、源泉徴収がどうのこうのいう労働者や生活者からみた
ら、そういうことはぜんぜんやっていない。やりたくてもやれない
ような生活形態を強いられる人たちがなわけです。ポリ公なんか
に酔っ払いがからんで、「お前、税金泥棒だ！」っていうと、ポリ
公が「お前、税金払ってないじゃないか」っていうような形でよく
言うわけです。実際はそんなことなく、税金はちゃんととられ
てるんだけど、とにかく、そういう形で攻撃されやすい位置に、僕
ら、寄せ場の労働者はいるんだと思う。そういうところ
に、今の攻撃がひとつ煮つまつてきているということがあります。
ここで、再び、さきほどのくり返しになりますが、例えば山谷の

場合を考えると、被差別部落であった橋場がそばにあったとか、在日朝鮮人の部落があったとか、少し足を伸ばせば本木がそうだとか、近くにあるわけですね。そういうふうなことで、寄せ場という空間を考えると、全部、もう一度、それが何なのかというのを、考えていかなければならないと思います。その辺についてはぜひ、今後、皆さんと一緒に考えていきたい問題だと思ふ。

それと、現在の問題について少し話すと、暴力団が皇誠会という形で山谷に今度登場してきた、それを我々は退けたわけだけど、西戸組はまだ残っている。ここで、かつての山口組のやり方をみてみたい。山口組は政治結社化しなかったんだけど、非常に巧妙に神戸港を押さえていったことがあって、そのやり方を、多分、皇誠会は知っているだろうし、もっと巧妙にやるだろう。それも今の時代を背景として政治性を持ったやり方でやるんじゃないかと思うのです。それで、山口組のことを簡単に話してみたいと思います。特に寄せ場と寄せ場からむヤクザの役割りみたいなことで、知っていることを整理してみます。

山口組というのは、一九一五年ごろから、権蔵（ゴンゾウ）部屋を持った神戸で人足部屋をやっていたらしい。問題は、四八年の六月に、GHQの運輸課というところが、戦時中、港湾運輸を運営していた統制会社を解散して、第一次下請けとか、第二次下請けとかいうのを禁止したわけなんです。そういう統制会社が解体されて、元請けが復活する。その元請けはどうやって港湾労働者を集めたかという、自分らの会社の中に作業部というのを作って、ここに下請けを置いて、労務者の手配と管理をさせるということをもって存続したわけです。それが四八年で一応民主化が打ち

出されるけど、そういうぬけ穴までチェックされない。労務報国会が労務協会として残されたと同じです。それは、四七年で打ち切られるんだけど、その精神みたいなものは引きつがれて、結局、港湾関係でも残っていくわけです。それをテコにして、山口組なんかは四十九年に神戸港の荷役業者を集めて親睦団体を作っていく。その会長におさまっていくわけです。それから、五〇年に朝鮮戦争が始まって、非常に神戸港が忙しくなってくる。そうすると、今度は支配者側—GHQは五年にはすぐ、実情に見合わなくなった民主化政策をとりやめてしまう。そして、運輸省に港湾運送事業法というのを制定させて、下請け制度をまず、復活させてしまうわけです。五二年に職安法の施行規則というのを改悪して、請け負いに係る労務供給を認めていくという形で、まず、復活してくるわけです。それをテコにして、今度は五五年に、山口組は—山口組っていうのは、そういう意味ではまだ、第二次下請けに依拠しているわけで—第二次下請けに依拠して自分たちの下請けのつながっているところをずっと集めて、百五〇人から百四〇人くらいの人を集めて、労働組合を結成していくわけです。そして労働組合を結成した時、山口組は何を言ったかという、当時の全港湾の神戸支部に対して、あれは第一次下請けに依拠しているから殿様組合だと言った。そういう形で攻撃をしながら、働く労働者からの信頼を獲得して、どんどん勢力を広げてのし上がっていったということだと思えます。ヤクザと下層労働者の関係については、下層労働者というのはヤクザに対してシンパシーを持っている人がとても多いんじゃないかと思うのです。だいたい普通の社会で、なんともうだつが上からず展望のない人が、ああいう力の世界に夢を見たいと思うのは

うのが、課題になっているようなんです。

たとえば、この六月に町内会の佐藤博道（勉強屋というドヤ経営主。一九五九年にも同じ役割で登場の名前で台東区議会に陳情書が出されている。それを受けて同区議会では六月一八日に「浅草北部の旧山谷地区の環境の浄化と改善について」自民党議員から質問がなされた——「労働者による路上での酒盛りや賭博行為、あたり構わずの用便、軒下でのたき火が行われ、空瓶、空缶、雑誌、たばこの吸いがら等のごみの山。婦女子の冷やかしや奇声、罵声。早朝からの右翼、左翼のマイク合戦。騒音と悪臭に悩まされ、一種の無法地帯の感すらあり、子女のしつけにも重大な影響を及ぼし、防犯、防火の上からも非常に危険であります。同じ区民でありながら、近隣の住民の迷惑ははかり知れないものがあります。以前は労働者とそれを相手として生計を立てた住民とが共存、共栄してきた歴史的背景のある町です。東京オリンピック当時には一万三千人もいた労働者も、一握りの悪質な者によって環境が破壊され、悪質が良質を駆逐するたとえどおり、まじめな労働者は他の地区へ散らばり、現在は六千人ぐらいに激減しております。「職業の紹介ならびに労働問題の解決」をうたっている山谷労働センターも余り有効とは思えない機能ぶりであり、またあぶれ手当といわれる就労印紙を不正に入手する者もあり、玉姫職安から月に二億数千万円もの金が支給されている。これらの問題は、町ぐるみ、区、都、国が一体となって解決すべきと思うが、せっかく存在する山谷対策協議会の見直しなど抜本的な改革とともに、当面の措置として清掃の倍増と散水車による水まきを実施されたい」（「区議会だより」「速記録」より）。

公安警察は、今いったような住民や区議会の動きの上に乗っかっ

て、地域住民の代表者として治安を維持する、というところを狙っている。ヤクザも過激派も、つまり、右も、左も、とにかく押さえるのが警察で、住民の味方です——そういう形をつくり上げようとしている。そういう意味で、この互助会戦のなかで警察が得をしよう、というか、二勢力の間の「ケンカ」を利用して警察支配を住民のなかに根づかせよう、という意図が強いと見てるんです。

対皇誠会闘争の後にも区議会が「山谷視察」に來ているんです。そういうのも合わせて、住民—地域の再編が進んでいる。しかも、そのさい発揮される警察の主導性に、我々は注意の目を向ける必要がある。そういった状況のなかで、警察はヤクザに対し「ヤクザとしての本性を露骨に出して、登場してくるのはまずいぞ」と言ってるんではないか。たたけばほこりが出てくる連中だから、マル暴あたりが先頭に立って彼らを脅しているんだろう。で、「もう少し利口にやらんとダメだ」と。「あいつらはマイクでガァガァ言ってるだけなんだから、その分については警察がチャント押えてやるから。争議団も行きすぎたら、恐喝でもパクるから」といった入れ知恵と恫喝が西戸組のほうにいつているんじゃないかな、という気がします。

そういう背景があって、彼らの今の「自重」つまり出てこないという情勢がつくり出されているんじゃないかと見ています。そういう警察主導の政治的入れ知恵に、ヤクザという単純な利権集団がどこまで耐えうるか、というのは別問題で、どっかで「もうタマランわ」つつって、出てくる可能性は充分ある。

山谷争議団としても、今は戦闘線の膠着状態として位置づけ、警察主導の解決はとにかく許さない、住民を使った政治的包圍網の打

破を志向している。

それからもうひとつ、建設資本の動向にも注目すべきものがある。山谷の労働者をどう使うか、という話が、東京建設業協会というレベル、あるいは軀体工業協同組合のレベルにおいて話されている。軀体業者というのは建設の起き上がりを全部請け負うんだけれど、その協同組合に一九七二年二月山谷現闘委対策としてつくられた「八日会」という組織があります。『やられたらやりかえせ』七四年田畑書店、一二八〜三一ページ参照)。その八日会の臨時会議が、この九月二一日東京軀体会館で開かれているんです。そこには、山谷手配の新井組、才賀組などが加わっている。また、二一日の会議では、山谷労働センター所長の鈴木平次郎が「雇用保険法一部改正をめぐる日雇労働者の新しい動き」という題で、講演をしている。そういう形で、末端の互助会だけでなく、建設業の中レベルと、それからもうひとつその上のほうの動きもあるんじゃないか。それと合わせて、地域住民に対する警察力の浸透をはかるような解決方法が出されてきている。そして、労働運動なり闘おうとする部分を孤立化させていこうというのが、今の向う側の政治的狙いだと考えているわけです。

対応する住民側の動き——敵対と体制支持の表われも、そういう露骨になってきたと言えるんじゃないか。例えば、今年の春三月、玉姫職安の横で青カンをしていた労働者が、地域の住民から、そのたき火の問題で、なぐり殺されるといふ事件があった。その後も、職安の近くの住民が棒をもって労働者を追いちらす、ということがあった。そのときは、たまたま近くにいたので我々も現場に駆けつけて、その住民と応対して労働者を守ることが幸いできた。そうい

うように、住民のなかに反発といったものがつくられてきていることが顕著になってきていると思います。で、その反発の出方が、ある意味で住民の側のゆとりの無さ、といったものを反映しているのではなからうか。ゆとりが無いから、目の前にあるものに対してストリートに反発するという形をとる。抑圧の移譲というか、転化というか……。そのところを警察が引きとり引っぱっていく。それが差別煽動の実態ではないかな、と考えているんです。昨年の横浜・寿における日雇労働者虐殺は、釜でも山でもどこの寄せ場にとっても、無縁どころではない、ということなんです。事態はそこまで進んでいる。ただ、各寄せ場の特殊性の問題ということは、ちょっと考えに入れておく必要があります。たとえば、釜なんかの場合、寄せ場の規模が大きいから、住民の生活と釜の労働者の生活がわりと溶けこんでいるでしょ。それにくらべて山谷の場合、すぐ横に零細な商人やら町工場がある。その人たちの生活の仕方が、山谷の労働者のそれとコロッと違う、というか、大分距離がある。釜の場合、それがほとんど一緒なんです——釜ヶ崎の労働者を相手にした商人とかね、たとえば古着屋とか、パチンコ屋にしても、食い物屋にしても、そうだ。山谷の場合、山谷の労働者を直接に相手にしてない商人なり、企業主とかが多い。たとえば皮革業なんか。だから、その辺での切断が生活感情面でのズレを生みだしているし、ひとたび生まれたズレはたちまち拡大していくんじゃないかな、と思います。寿なんかは、その代表的なものだろうと思います。

ところで、一方で山谷の労働者の生活の仕方にもこの間変化が生じたのではないか、と考えているんです。より正確に言えば、仕事内容とか収入の度合の変化だろうか、それが持つ意味もずいぶん大

きい。一九七三年末以来のオイルショック以降、仕事が極端に減ったということもあるし、職種がほとんど土木、建築に限られてくるという時代背景がある。それまでだと、製造業の臨時雇もあった。たとえば、月島の三菱とか、大日本特殊鋼で溶鉱炉に鉄をバースト入れたあと屑を落としたりとか、それから構内の宮織的な作業——下水を作ったりとかいう仕事なんか、けっこう製造業はたくさん来ていたんです。最近宮織なんか来なくなっただけというのは、結局会社側が系列化して下請けなんかをキッチリ把握するようになったためじゃないだろうか。そして、たとえば、今まで一〇人ぐらいでやっていたのを五人ぐらいでやらせる、その労働強化に耐えられるような人たちを一定程度恒常的に抱えこむ、という形になっているんじゃないかと思えます。それに関連して、最近の独占資本の方針として、多能工化というのを打ち出しているでしょ。一種類の仕事しか出来ないんではなくて、何でも出来るということ——鳶もできるし土方もできる、という型の労働者が要求されている。だから、単純肉体労働といっても、そういうふうにも出来るというのでなければ、どんどん削られていく。そういう何でもできるといった技術を身につける機会を奪われていった者なんか、逆に寄せ場に沈黙していく。そういう人は、本当に機械化できない建築や土木の末端で、低賃金で押えられる——そういうふうに変ってきたんじゃないか、と考えているんです。昔だったら、山谷から、港湾にも土木にも行った。運輸関係もあった。もっともトラックの上乗りなんかは今でもあるけど。港湾（芝浦なんか）はものすごく仕事が多かった。やな仕事でいえば、銑鉄の塊りとか、塩の陸揚げなんかがあった。雑貨もあったし、いろいろあった。俺なんか一九七一年釜ヶ崎で暴

動があったとき、磯江さんと、中村荷役というところで魚の陸揚げを三部通しで（つまり、朝行って夜やって朝行って、それで金作って釜ヶ崎暴動やってるっていうんで）行ったことがある。そういうふうなことができた。だから呑んで路上に寝るといふだらしないところはあったけど、まだそれなりに生活感情にはゆとりがあった。その後それが、仕事の種類も狭められてくるし、仕事の量も減ってくるなかで、寄せ場の労働者のなかにゆとりがなくなってきたんじゃないかなと感じます。

もうひとつ年令の問題もある。寄せ場労働者はものすごく高年齢化している。現在、山谷争議団の年令層が三〇才台平均で、これは山谷のなかでも若いほうになるんだけど、新しい活動家層というか、最初に世の中に不平不満を持つ二〇才台ぐらいの若い労働者になかなか出会えないでいるのは、象徴的だと思います。それに対し、現闘当時は、二二、三才が一番花形だったんじゃないかな。二七、八才といったら、もう中堅か指導層でしょう。関連して驚くのは、アブレが高くなった（六二〇〇円）というのもあるけれど、鳶がずいぶん職安から仕事へ行くでしょ。昔はもう職安なんか、鳶はもう絶対に寄りつかんかった。ほとんど都電通りで手配されていた。それが今では職安から仕事に出、アブレもとりに来ています。だから、単価もずいぶん安い。それと、もうひとつの違い、前と今のズレを感じる点がある。昔は、土方でも仕事があることで「連れ」ができた。仕事へ行ったり飯場へ行ったりして出会った仲間がグループをつくる、そして、そのグループがひとつの単位となつてまた仕事に行くというのが、けっこう多かった。そういう自然発生的な徒党ができる。それが、ひとつの、闘っていく場合でも単位として何とか組織できないものか、

というのが現斗時代の課題だったんです。「連れを組織しよう」と。それが、コーちゃん（船本洲治）のいった「労働細胞から戦闘細胞へ」ということなんだ。ところが、不況以降、その連れがほとんど解体している。ほんとにひとりぼっちになった。連れ単位で仕事に動くのが困難になってきている。どうやらこうやら、連れの成り立っているのが酒屋で、だから俺らは「野田屋反戦」とか「世界反戦」なんて冗談を言ったりしている。そういう感じしか残っていない。昔は仕事と、帰ってきて呑むことと、それからドヤへ泊ることとがわりと連れとしてあって、そういう共同性がひとつの武器になる。それが今はほとんどバラバラに解体されてきている。そこいらへんも、向う側が差別煽動を行う場合、突いてくるこちら側の弱さの点ではないかなと思います。今は仕事にありついたらしがみついているんじゃないかな、直行層なんかはね。直行層の一部に、グループでというのが残っている場合もあるんだけど、それがわりと利害集团的結合以上に進んでいないように思います。そこいらへんの事情を明らかにすることは、今後争議団が労働者大衆のなかに入っていく場合の課題になっていくと考えています。

つぎに、現役層の多くが入っている飯場のことですが、まず言えることは面白味のある飯場はなくなってきているんじゃないか、ということだと思います。というのは、飯場がすぐソフトにはなってるんだけどね、わりと暴力事件とかそういうの少なくなってるんだけど、ゼニの稼げる飯場とかいうのはなくなってる、キッチリと管理されている。賃金なんかも。そういうなかで、キッチリしようとして出来ないのが、土方飯場なんです。争議団はそういうところを突いていくわけです。そういうように、人夫出し飯場でも一般的には近代

化されているのが、今の飯場の特徴になっている。だから、一〇日間居てすぐ出てくるような構造が、すごく多いんだと思います。

労働者の側からすれば、現金仕事がないから飯場へ行く、という場合が多くなっていることは事実です。昔は、労働センターは現金仕事が主だったのね。それが今はほとんど飯場紹介に変ってるでしょ。で、みな仕事なくなったらだいたいセンターへ行ったり、飯場へ行ったりして、まずしのぐと。まあ、そのへんある意味では昔も今も変らないんだけど、飯場へ行っていったときの切実さみたいなものは、今のほうがもっと思いつめたような感じで飯場へ行ってるんじゃないかなと思います。全体としての仕事の量というのは減っていないのかもしれない、それだけ飯場の量がけっこう増えている、とは言えるでしょう。

で、最近の特徴として、労災のみみ消しがすごい増えている、飯場なんかでね。争議団なんかがおヤジを呼びだして、なんでもみ消すんだって追及すると、「報告すると、とにかく仕事もらえなくなる」というのがものすごく顕著なのね。もう四、五年ほど前は、それほど顕著ではなかったんじゃないかなあ、という気がする。直ぐに仕事切られる、というふうにオヤジの側があわてるっていうこと。そういう上のほうからの、独占のほうからの締めつけが、下へものすごいスピードで来ているというのが、この間の特徴なんじゃないかな、と考えています。そういう意味で、淘汰がものすごい進んでいる、と。そのシワ寄せが下へ来る。その下へ行った段階で、できるならば労災のみみ消しをふくめ、労務管理をキッチリとできるようにさせたいんだろうけれど、その手立てみたいなのはまだまだ出上がっていない、というのが今の実態ではなかるうか。オモテの

暴力的な皇誠会と、ウラの利権組織——山谷互助組合といったものが、その手立てとなつて苛酷な労務管理を狙うということにでもなれば、独占資本にとってはきわめて便利でまことに好都合になるだろうと思ひます。独占資本が下請けに労災もみ消しを強いるのは、たんに建設業者は労働者を大切にしますよ、ということをPRしたいんではなくて、上から下まで、末端にまで労務管理——労働者支配を貫徹したい、そのためのひとつの手段に違ひないと考えています。末端でというのは、一番先端で仕事をしている人間で、独占はその部分を直接雇傭し抱えこんでいるわけではないよね。しかし、そこをも支配・包摂するような方法というか、システムを作ろうとしているんだと思ひます。

寄せ場の高年令化問題に附随しては、寄せ場にも来ないで新聞紙上の広告にだけ依存している層の実態みたいなものを、もう一度見てみる必要があるんじゃないかな、と考えています。そういう層がけっこういて、紙上広告がひとつの小さな労働市場みたいなものになっているっていうことがあるのかもしれない。そういう場合は、飯場から飯場へと渡り歩くことも多いんです。まだ本籍を言えないような状態になってなければ、通じるわけで、たとえば「福島県から出てきたばっかです」とか言つて新聞広告に応じれば、けっこう通じて生きのびれるわけです。そういう若い人がけっこう多いんじゃないかな、という気もするんです。それで、今は好況期と違つて日雇いをやつて日銭を稼ぐことのうま味が減つてきているわけです。好況期だと山谷へ行けば、ちょっと若くても直ぐ黨でなんぼか稼げるんだけど、今はそんな時代ではない。万博だと大阪へ行けば、グループ組んで請け仕事すればいい銭稼げるって、そういう時

代ではもうないからね。若い人も寄せ場に来なくなっているんじゃないか、と思ひます。若いときからくすぶつて、っていうのかな、そんなふうに感じます。だって、寄せ場へ来てしまつたら、仕事にありつくのも新聞へ行くのとあんまり違ひない単価でしょ。そして、流れてきて薄汚ない人間と付き合うよりも、三疊間の安アパートにいて、仕事へ行つて即帰つてくるか、テレビでも見ているか、繁華街をふらついていけばいいんだものね。その方がカッコイイし、と。そんなふうもあるのかなあ、と思つてるんです。だから、青木秀男さんが分類しているような各層は、全部寄せ場にいるというのではなくて、寄せ場に居るのは沈澱層が大部分で、若いくすぶりとか、現役層というのは案外市民社会に潜んでいる、ということもある意味で言えるかもしれないと感じます。

最後に、宇都宮病院と保安処分の問題ですが、これについておれらが考えなければならぬことは、ひとつは狩り込みのこと、もうひとつは駅手配、高田馬場の職安、新宿周辺のドヤという問題です。下層労働者が労働と生活のなかで疲弊して、最後に狩り込みされて精神病院にぶちこまれる、そういう形で保安処分される、という前者の問題が本筋だろうと思ひます。その一方で、現在、新宿がもっとも露骨なんだけれど、いわゆる環境浄化という問題が前面に出てきている。その背景として、後者の一連の問題——駅手配、馬場職安、新宿周辺のドヤ（新大久保付近）の特質が、当面直接大きく浮び上がつてきている。あの辺のドヤは朝の10時になったら全部追い出される。そこに泊つている労働者は、ほとんど高田馬場から仕事に行つてくる人が多いんだけど、要するに生活空間がないっていう実態があります。それと、たとえば職安から仕事に行つてアブ

レをちゃんと取るために、手帳をとろうとしてもなかなか出してくれない。住所の問題。ドヤがそんな調子だし、ドヤに住んでない人は資格証明がとれない——そういうことで手帳をとってる労働者が極端に少ない。そういう意味で、日雇いとしての当然の権利からも排除されてる労働行政があるということです。すると、そういう人が行くところは、必然的に駅手配。駅手配はほとんど超ケタオチというのかな、かつての大神総業（八〇年）のような実態です——一日四五〇〇円でそこから飯代が千円なんぼ引かれる——そういう飯場にみんな駅手配で行く。だから、もう働くのがいやになるから、新宿あたりでくすぶって、それこそ余った飯でも肴にして吞んでみんな「宴会」やってた方が楽しいっていうのは、これはもう正直な話なわけですよ。環境浄化ということで商店の人たちが、当面まず相手にするのは、こういった部分になるわけです。我々の側としても、最初取り組まんきなやらんことは、そこいらあたりの実態景露になります。また、彼らが山谷に来て我々争議団のところに来れば、白手帳は必ず取れるわけです（組合が住所を保障するという形を行政に認めさせている）。もちろん、それで問題は解決しないわけだけど、一步ではあるだろう。で、働くことのなかで怒りを抱くことのできるような感性を、労働者のなかに育てていかなければならない。そうしないと、闘いのきっかけみたいなものがないんじゃないかな、と思います。

ところで、こういった狩りこみ——「環境浄化」は、新宿の場合が一番露骨で進んでいるけれど、たとえば台東区でも前述のように区議会への陳情などという形で追隨する状況が生まれていることに、注目しなければならぬ。

あんまり過去の歴史から類推するのは良くないけれど、さきの義人党の全民労の動きがひとつあるし、今度の国粋会系金町一家の互助会の動きもあつたわけです。要するに、もし互助会が成功していたら、その息のかかった業者——飯場または現場と労使交渉をしたりするときも、テロリスト・近藤正人あたりがシャシャリ出てきて「そういう労使の問題はこっちで受けます」なんていうことになつただろう。現に飯場調査の過程で、飯島組だか住吉連合だかの幹部がそんなふうになってきた例に出くわしています。馬場なんかも極東組の一元支配が進んでいるんじゃないか、なんて噂されています。河原町では、（地元の）千住一家というのが、河原町の職安に仕事をだしている業者をまとめつつあるといわれています。各寄せ場において事態がそういうふうに進んでいく。その上で、職安機能自体を職業紹介というより、訓練機関みたいな形にする、職安行政の方向をそういうふうに変えていくという政策がとられたとすれば、どうなるか。要するに、ヤクザ的な支配がオヤジをたばねていく一方、労働者との窓口は労務報国会として彼らが登場する——そういう予測は成りたつと思います。実際はもう少し先の時代になるだろうけれど。そのためには、ヤクザが社会的認知をとらんとだめでしょ。その認知のとり方が政治結社として出るか、互助組合として出るか、というふうになる。いずれにせよ、警察にも受けが良くて、地域住民にも受けがいい、そういう認知が必要なんだと思います。問題は、この一年間の攻防のなかで奴らヤクザがどれだけ「成長」しているかということなんです。こちら側の闘いによって、反革命も密集性を増していることだけは、確かなんです。このところ、寄せ場に奴らが登場してない背景には、そういったことがあると考えられます。

奴らがそこいらへんの利口さをつけて、再度政治的に登場して来る可能性が有ります。「註」この話を聞いた後分った事実として、金町一家―西戸組が山谷互助組合の看板をもう一度塗りかえて、ついに「千住日雇労働者互助組合」というふうに一種の労働組合として出てきた。はからずも、ここでの山岡さんの予想が当たったことになる。」

「ここで山岡さんのほかに、又やんにも登場してもらって、いままでのところではあまり詳しく語られていなかった宇都宮病院問題について、補足してもらいました。」

又やん 宇都宮病院と山谷の関係が表に現われてきたのは、今年八四年春だけれど、精神病院と山谷の関係構造自体は、かの南埼玉事件（一九六六年、城北福祉センター職員、上野生活更生相談所職員と同病院との癒着）以来のものに他ならない。釜なんかを含めれば、ずうーっと続いている。山谷でもあのととき問題になった南埼玉姫診療所は今でも存在していて、労組がステ貼りをしていたこともある。

山さん 問題は、南埼玉にしても宇都宮にしても、社会のなかで廃兵になつた者さえ商品にもう一度しようとする領域がある、ということだろう。そこは、ほんとうは人間が身心ともにギリギリで救われなければならぬ最後のところなのに、そこにさえ、いわば地獄がある。それはいったい何なんだ、という問題なんじゃないか。

又やん 医療というのが、不良労働力商品のなかでの選別淘汰作業に他ならないということが有る。で、精神病院に終身閉じこめておいて虐殺までしていく構造と、他方病院に入れて、もう一回また社会で

労働力商品として使えるような人は、どんどん出していく。ということが有る。その部分に関しては、病者というレッテルをいったん貼られてしまうとキツイから、結局山谷に流れてくるようになる。また、医者などから「お前なんか山谷に行け」といわれたり、患者仲間から「山谷というところがある」と教えられたりしている、ということもある。つまり、寄せ場から狩りこまれて、ああいうものすごいひどい精神病院にぶち込まれてしまう、という場合ばかりではないことが分る。一言でいえば、不良労働力商品の再生または再処理ということで、精神病院と山谷⇄寄せ場の間の環流ということにもなると思う。

（註）なお、宇都宮病院―狩り込みの問題に関して詳しくは、「宇都宮病院と狩り込み体制」『インパクション』三十一号、八四年九月一五日刊、三二―四二ページを参照されたい。」

（八四・一一・一六

於 職安二F）

日刊 たまひめ

発行所 山形県 尾花町 尾花 電話 873-0042(尾花) 876-4237(尾花) 801-2719 (尾花) (人口1000)

夕刊

一九七二年二月三日 日回

もっと大きな団結で テント村解放区を

■ひとりの餓死・凍死者も出さぬ

山のなかまたち、玉姫公園にはテントもつきつとどき、ただだしもみんなの力でどんどん進んでいる。二十五日から人民パトロールを開始している。マンモスのホリ公のパトロールはワウザと同じように労働者をおどしたり、病人をけり飛ばしたり、たき火を消したりロクなこととはしない。おれたちの人民パトロールはなにかまを守るためのものだ。ただかう医者もかけつけてくれ、人民パトロールもできた。体の弱っているなにかまば、えんりよなく来てくれ。それからな、紙しばい、空手の練習もみんなをやった。今夜はのどじまんをやる。豊祭りにも来てくれた加藤君がギターをもってやってくる。特別出演だ。あしたは正月だ。一日、二日にはもちつきやすもうをやる。みんななかよくめし食ひ、たき火にあたり、しかし、それだけでなく、おれたちの手でおれたち労働者の文化をつくらう。みんな、玉姫のテント村に、なにかまといっしょに集まろう!!

「なにかまからカンパがすでに八万円以上もあつまる」

きのお、テント村ができてから、きよおの屋敷まで、なにかまが少しずつ出してくれだ。カンパがもう八二、四〇四円にもなつた。大助かりだ。だが、金ほあればあるほど助かる。金のある人はなにかまのために、少しでもいいから、カンパをしてほしい。金ほ本部にもって来てほしい。

「メシの時間におくれるな」

テント村でのめしの時間はだいたい次のようになっているので、おくれないうえにお来てくだされい。

- ①朝めし 七時～九時
- ②昼めし 一二時～一時三〇分
- ③夕めし 六時～八時

食器は必ず自分でかたづけよう。ひとり一食ずつ食べよう(余ったら二食くえい)。

本日 夜東西 歌合

きよおの夜、NHKテレビでは歌合が玉姫のテント村ほもつとすばらしい。テレビはだつたらないが、テント村ヌテリース(翼台)で、きよおの夜やる東西対抗歌合がせんば、みんなうたをみんうたあう。オノキは天歌連だ。

鼻みずたらしながら 院より みんなでがんばる (オ一日め)

テント村の初日のきよお、午後一時半に玉姫、野路病院の診察が開始された。小だんこき使われくさつたメン食われ、病院にも行けず、冬のさむさもつたつてか、多くの労働者が人民のテント病院にきた。週に酔っている人が多く、とくに急を要する病人は少なかったが、かなり長い間の治療や生活の節制が必要で人が多かつた。と医者も言っている。とくに、胃腸や肝をおろしている人、血圧の高い人が多かつた。寄付した労働者の数は五五人であった。テントは二張りでおよそ三〇人ほどを収容した。医療班ははじめはかつてがわからずオオオタしたり、緊張していたが、労働者と話さかわすうちに信頼もなれてきた。夜はパトロールにも参加し、ハナみすたらしながら、どうにか一夜のりきつた。これからもがんばるぞ。

人民パトロールに参加しよう

毎晩、人民パトロールをやっている。働いているなにかまがいるかもしれない。ホリ公に足げにされているなにかまがいるかもしれない。みんなを思おう。

金ヶ崎のなにかまも越冬を手づけている

二日前、山にすけつとにかけつけてくれた金ヶ崎の兄弟たちもテント村つくと、労働者の力でおぼろげに山と金の労働者は血で結ばれた兄弟だ。こっちはますますがんばるぞ。

ふと二つのあつたかい

「なにかまよ、カンパを」

現金やモノがまだ不足している。飯場がふたつあつてふと二つのあつたかい人は、なにかまが第一文で書かんしてからの、なる

と少ししても、カンパしてくれ。たき出しのメシはただだけど、メシ代ある人は少しカンパしてくれ。

★今夜で正月のモチが出たら、モチを炊き出したのの書付(カンパ)してくれなかい。

★裏れに行、た現場で残材がたくさん集まっていたのをおぼえてたお教えてほしい。たき火の材料が不足しているからだ。

★本夜、ニンジン一本でもいい、あつたらもつてきてほしい。

「もしパクられたらモクビで」

ホリ公にいいめられているなにかまを助けよおとしたりしてホリ公に不当にパクられたら、何をきかされてもしやべつちゃダメだ。ただ、救済連絡センターに電話かけて、井頭さまにべいとおぼえ。しゃべつたら、せつたい不利になるだけだ。